

## 1. 1955年度漁撈科の試験研究の概要

## A. 海洋調査

海洋調査は各種漁業の基本をなすものであり、その調査の正確を期することは漁業の消長に大きく影響するものである。

現在東支那海及び沖縄周辺、宮古、八重山の調査は日本においても余りなされていない現状で当研究所としては試験船による調査と一般業者の状況、長崎海洋気象台の旬報を基礎に海洋の状況を把握し、是によつて1955年以來月別鯖漁場圖を制作し情報として各業者にも配布して来た。

中城湾に於ける定点観測は1952年以來毎日3回観測し参考資料としている。(別表参照)

## B. 鯖鮫釣漁業

琉球に於ける鯖鮫釣は1953年発見され、1954年から鯖鮫釣漁業として採用された漁業であるが、未だ軌道に乗らない現状にあたるため漁場の範囲、適水温、回遊経路、漁法等今後の研究に俟つことが多いので1954年以來調査研究を継続実施している。本年度も特に適水温漁場範囲の調査に重点をおいて実施した。

## C. 回遊魚(サシマ、サ、するめいか)の調査

さしマ、鯨類が琉球近海に来遊することが1955年1月に確実になつたので、その資源量、回遊経路、漁法の調査試験を本年1月から3月迄実施した。伊平屋沖、久米島沖で「さしマ」を発見したが魚群が稀疎で散在していた為漁獲するに至らなかつた。今後引き続き実施し冬季漁業としてその成果を挙げる可く努力する計画である。この調査期間中、するめいかを発見したので引続き漁法、分布状態の調査を実施した。従来するめいかは秋季に日本各地で大量に漁獲されているが、沖縄では馬場イカ以外漁獲された事がなく、その回遊経路も不明であつたが本年3月久米島北西(100等線)の海洋でその大群を発見したのである。漁具の準備がなく只一本の擬餌で50尾余を捕獲したのであるが、今後の調査研究によつて新漁業として採用される事と思せられる。

## D. 鰹漁場及近海鰹漁場調査

3月以降6月迄鰹魚群の発見、近海鰹の来遊時期等試験船及一般業者の情報を照合し、その資料を制作する事に努め1955年以來鰹漁況情報を配布して来た。

## E. 沿岸漁業

小型試験船による棒受網漁業、底延縄漁業等6, 7, 8月に実施した。

## F. 一般に對する指導

1955年9月八重山群島、1956年4月宮古群島に試験船を派遣し、現地にて火光